

蔡の祈禱所

紀伊徳川家と高尾山

明治大学博物館

外山 徹

雅之助誕生

明和九年（二七二二）二月から五月にかけて紀伊徳川家を施主とする八千枚護摩供が執行された。それに引き続いて、翌月からも当主重倫の病氣平癒と懐妊した愛妾お八百の方に対する安産の祈禱が依頼されていた。前号ではその御札・護符についての問い合わせの書状を取り上げた。

お八百出産

七月二四日付の書状は、六月・七月の御札・護符の未着を問うものであったから、久し振りの音信だったのだろう。安産の祈禱を依頼していた女性が来月臨月を迎えるという報せであった。続いて八月二八日付で写真の書状が到来する。

いては將軍家にも親類にも、また家臣らにも表向きに広めていません。これは先にお知らせしていたことからお伝えする次第です。

一筆致啓達候
紀伊殿妾服二今日
男子出生被致候尤右出生之儀者公辺其外
縁家方并家中二而も表向江者弘メ無之内々之儀二御座候右者先達而御申越候品も有之ニ付申進候 恐惶謹言
浅井庄左衛門
八月廿八日 昌凭(花押)
葉王院様

短いながらも書体の整った見た目に美しい文面である。右の現代語訳は次の通りである。

一筆啓達します。紀伊殿（当主重倫のごと）に妾腹の男子が今日出生しました。おとも、この出生につ

て眺めた一七世山主秀興の心持ちをご想像ください。



雅之助出生を伝える浅井庄左衛門の書状

本連載では近代に入ってから編纂された『南紀徳川史』の記載に依拠するところも多いが、葉王院文書に含まれた書状類は真正正銘その当時に作成されたものである。そのため、今日男子が出生したことが、まだ公式に表明していないことなど、文字を眺めるにつけ歴史のリアルに実感を持つて接することができる。これは実際に男子が出生の直後、葉王院に知らせるべく浅井庄左衛門か、恐らくはその指示で書き役の者が墨をすつて筆でたたためたものである。そして、恐らく二月号の記事にあつたように、二名の下級藩士が急ぎ甲州道中を下り、高尾に登山して届けに来たものなのである。それを手に取つ

九月一日には第二信が到来する。「先だつて妊娠の方、安産ご祈禱ご執行、御符・札守等お指し越しそうろう」と、出生した男子の母が先頃から祈禱を依頼していた人物であることを明確にしている。「右につき先だつて申しまいりそうろう通り、去月二十八日ご男子ご出生、いよいよ安全にお肥立ち、かつ産婦の方も何の障り無く肥立ち申されそ

である。当然ながら今と違って出産時のリスクも高いであろうし、産育儀札の存在が示しているように、新生児にとつて最初の一週間は無事生育に向かうか否か大事な時期であつた。「これにより右

ご祈禱料として、紀伊殿より白銀十五枚あいつかわされそうろうつき、持たせ差しまいりそうろう」とあるが、この間の無事な生育に関する祈禱料というニュアンスとなる。「これにより」すなわち、「安全に」「障り無く」「肥立ち」という順調な生育を見届けた表現や、最初の一報から祈禱料奉納までの一〇余日間という「間」の取られ方が、緊張と安堵の様子を窺わせる。そして追伸として、重ねて出生は未だ公表されていないことを述べ、その旨念押しをしている。紀州家と葉王院は、この

ような内証の話を共有する間柄となつていた。

祈禱の定式化

三日後の九月二三日付で「先月二十八日出生のご男子、いよいよ安全に肥立ち申されそうろうよう、ご祈禱ご執行なられ御札守お差し越しならるべくそうろう、産婦にもいよいよ別条無く肥立ちそうろうようご祈禱ご執行なられ、御札守とお差し越しならるべく」という書状が再び到来する。前便と似た内容だが、ここではそれ以前の祈禱に対する祈禱料の奉納を記し、ここでは今後の依頼が述べられていることになる。追伸には「ご祈禱ご執行なられ、御札守お差し越しなられたきとの義」と記されている。これは「お差し越しになりたいとのこと」と現代語訳できるので、二三日付の書状における祈禱依頼は葉王院側からの申し出に対する回答ということになる。

続いて確認できるのは二月二八日付の書状となる。この間、十一月に年号が安永と改められている。よく「明和九いわく」のゴロ合わせが言われるが、この年は江戸大火があり、大風雨や早魃など異常気象が伝えられている。しかし、重倫にとつては前年夭折した弥之助に代わる待望の男子出生という、前途に希望のさす年となつた。この書状では「紀伊殿所労早く快然」「ご祈禱当七月より絶えずご執行」とあり、実質的に春の八千枚護摩供以来継続して祈禱が執行されてきたことが分かる。書状の後半には簡条書きで次のようにある。

重倫・雅之助・お八百の三者に対する簡条書きの祈禱内容は、翌年の七月付でも同様の記載が見られ、以降、書式としても定式化されたものとして継続してゆく。明和八年九月の直筆書状の到来翌春の八千枚護摩供、そしてその最中のお八百懐妊と男子出生がその後しばらくの紀州家と葉王院との密接な交渉へとつながつてゆくことになった。おことわり 本連載では史料の引用について、読みやすく原文に手を加えています。



三者の祈禱を記す 八百、お、雅之助、重倫

重倫、雅之助、お八百 三者の祈禱を記す

白銀三拾枚
紀伊殿所労早く快然
これあられそうろうよう、当七月より絶えずご祈禱ご執行そうろうつき、これあい遣わさる

白銀拾枚
重倫・雅之助・お八百の三者に対する簡条書きの祈禱内容は、翌年の七月付でも同様の記載が見られ、以降、書式としても定式化されたものとして継続してゆく。明和八年九月の直筆書状の到来翌春の八千枚護摩供、そしてその最中のお八百懐妊と男子出生がその後しばらくの紀州家と葉王院との密接な交渉へとつながつてゆくことになった。おことわり 本連載では史料の引用について、読みやすく原文に手を加えています。